

## アビジャンの不良

## “ヌウシ”

鈴木裕之

「アッ、シノワ（中国人）だ！」  
 と言って近づいてくるガキども。「チ  
 ョチョヨー」などと言いながら例  
 外なく空手のマネ事などをしてみせ  
 る。これは近年アフリカに大量に出  
 回っている香港産（？）安物クンフ  
 ー映画のアフリカ文化に与える影響  
 の大きさを物語っていると言えよう。

クンフー映画がこれほど流行する  
 以前、アフリカ大衆の人気の的は西  
 部劇だった。いずれにしても善玉と  
 悪玉がいて、前者が後者を力でやっ  
 つけるという構図は同じである。ク  
 ンフー映画の場合、俳優は中国人で  
 ある。この事実はアビジャンの人々  
 に若干の困難を強いることになる。  
 つまり彼らにとって、中国人の顔は  
 みな同じに見えてしまうのだ。だか  
 ら映画のなかで善玉と悪玉とを取り  
 違えるなどという事態も起こりかね  
 ない。しかし西部劇の場合、そのよ  
 うな悲劇のおこる確率はグンと低く  
 なる。なぜなら多くの場合、正義の  
 味方の凛々しい姿に対し、悪者の顔  
 には一見してそれとわかる目印が付  
 いているからだ。その目印とは“ヒ  
 ゲ”である。鼻の下と顎にたくわえ  
 られた毛むくじゃらのヒゲ。ヒゲは  
 “ワル”の象徴なのである。

コートジボワールの経済首都アビ  
 ジャンは大都会である。第三世界に  
 おいて、都市が社会的矛盾の巣窟で  
 あることはもはや常識と言えよう。

ということは、当然学校にも行かず、  
 街をブラブラしている少年も多い。  
 彼らは不良である。不良はワルであ  
 る。西部劇ではワルはヒゲをはやし  
 ていた。いつしかアビジャンの人々  
 はこの不良どもを指して“ヒゲ”と  
 呼ぶようになっていた。それも当地  
 で最も広く通用する現地語、ジュラ  
 語で“ヌウシ”と。

アビジャンで生まれ、育ち、ろく  
 に学校にも行かず、主として通りを  
 生活の舞台としている少年達。彼ら  
 がヌウシである。12歳頃からそれら  
 しい雰囲気身をにつけ始め、18歳ぐ  
 らいになると、結構いっばしの不良  
 ズラをしている。20歳を過ぎると、  
 「こいつはちょっと恐いな」という  
 感じになってくる。

「スズキ、あいつらはな、泥棒だ  
 から気をつけろよ」などと親切に忠  
 告してくれる大人達。「バンディ」  
 (仏語, bandit: 強盗)、「ブリガン」  
 (仏語, brigand: ならず者)、ヌウシ  
 にはこういったレッテルが貼り付け  
 られる。しかし彼ら全員が犯罪を犯  
 すわけではない。確かにアビジャン  
 の中央警察署の地下にある留置所  
 に行くと、小便臭い牢屋の中に結構な  
 数のヌウシ達が押し込められている  
 のを目にすることができる。スリ、  
 ひったくり、かつぱらい、たまには  
 強盗殺人などという恐いものもある。

逆に彼がヌウシであるという“状況  
 証拠”だけでしょっぴかれてきた無  
 実の者も多い。「ポリ公はオレたちヌ  
 ウシの申し開きなんか、まともに聴  
 いちゃあくれないのさ！」。

確かに犯罪人もいるが、たいてい  
 のヌウシは彼らなりの方法で金を稼  
 いでいる。彼らの経済活動の場は、  
 アビジャンの大小様々の“通り”だ。  
 「ピッカピカの仕上がり」-靴磨き、  
 「朝夕読もう」-新聞売り、「頼まれ  
 なくても引き受けます」-自動車の見  
 張り番、「大切にしよう身分証明書」-  
 パウチッコ屋……。こうやって小銭  
 をかせいでいく。

アビジャンで日々小銭を稼ぎなが  
 らヌウシとして生きていくためには、  
 幾つかの条件を満たす必要がある。  
 客を逃さないために、身のこなしは  
 素早くなくてはならない。縄張り  
 を守るために、その顔に凄味がなく  
 てはならない。イザという時に備えて、  
 逃げ足が速くなくてはならない等々。  
 そして、本物のヌウシであるために  
 満たさなければならない絶対必要  
 条件がさらにもう一つある。それは、  
 彼らのコトバを喋らなくてはなら  
 ない、つまり彼らの間でのみ通用する  
 スラングに精通してなくてはなら  
 ない、これである。このヌウシの喋る  
 スラング、これもまた“ヌウシ”と  
 呼ばれる。ヌウシがヌウシを喋るの  
 だ。

ヌウシがヌウシを喋っているのを  
 ヌウシでない者が聞いても、何を言  
 ってるのかさっぱりわからない。基  
 本となるのはフランス語で、かなり  
 崩して話す。それにジュラ語をはじ



アビジャンの不良「ヌッシン」

めとするアフリカ諸語や英語をもとにした単語が加わり、アビジャンのヌッシの生活の機微をすみずみまで表現できるボキャブラリーが十分揃うことになる。近年アビジャンでは、このヌッシをレゲエやラップのリズムに乗せて唄う歌手が人気を得ている。

人気レゲエ・シンガー、ワビー・スパイダーが唄うヒット曲「ドラ・ド・トーゴ」、それはアビジャンのヌッシに対するメッセージなのだ。ワビーの両親はナイジェリアからやってきたが、彼自身は生まれも育ちもアビジャンの下町ボロマコテ、真正正銘のヌッシである。

「ドラ・ド・トーゴ」はフランス語、ジュラ語、そしてヌッシを混ぜて唄われる。つまり、ヌッシを知らない者が100%この唄を理解するのは不可能、という仕掛けである。ドラ(drap)は「困った問題」、トーゴ(togo)は「100フラン・セーフア」(CFA, 1 CFAフラン≒0.5円)を意味する。「ドラ・ド・トーゴ」(Drap de Togo)は「100フランをめぐる難問」ということになる。

トーゴは国名だが、かつて西アフリカのセーフア・フランの硬貨はトーゴで製造されていたことから、100

フラン硬貨をトーゴと呼ぶようになったという。ちなみに25フランは硬貨のなかで物理的に一番大きいので、「グロス」(仏語grosse:大きい)、50フラン硬貨はぐっと小ぶりになるが、貨幣としての価値は25フランの2倍なので、「ドゥ・グロス」(仏語deux grosses:2×グロス)と呼ばれる。ヌッシの生活を回転させる道具立ての主役は、これらグロス、ドゥ・グロス、トーゴといった硬貨なのだ。

では、いったいドラ・ド・トーゴとは何か？

トーゴ1枚あるとバスに乗れる。バスはヌッシに限らず、アビジャンの人々の主要な足だ。路線にもよるが、基本的には一度乗ってから降りるまで一律100フラン。つまりトーゴ1枚。「タクシー代なんてとてもじゃないが払えないし、グバカ(ボックスカーを改造した小型乗合バス、料金は75フラン)は街中どこでも走ってるわけじゃないだろう。やっぱバスが一番さ！」。

しかし彼らヌッシが常にバス代を払えるとは限らない。トーゴ1枚と彼らのポケットの中にある。しかし金を稼ぎに出掛けなければならぬ。それにはバスに乗らなければ。アビジャンは広い。歩いていたら日が暮れる。ワビーはそんなヌッシ達の心を代弁して唄う。

アニキ、

俺をたすけてくれないのかい？

アニキ、トーゴくれよ！

今日、街に行くバス代がないのさ

仕事を捜しに行くんだ

トレッシヴィルで

待ち合わせがあるんだ

仕事を捜しに行くんだ

港で約束があるんだ

バスにタダ乗りなんてしたくない

絶対そんなつもりはないんだ

運悪く抜き打ちで行なわれる検札に引っ掛かるものなら、その場で罰金(1750フラン)を払うか、さもないければ即警察に連れていかれる。要するにヌッシの場合は罰金など払う金がないのだから、牢屋におちこまれることになる。これが「ドラ・ド・トーゴ」である。ワビーの叫ぶ嘆きが、そのままヌッシ達の嘆きと重なってゆく。

検札官がきたら

バスの中はパニックさ

切符を持ってなかったら

バスの中はパニックさ！

バスから飛び出して

その拍子に足なんか折ったら

それこそ大問題だぜ！

100フランのせいで

バスから逃げた方がいいが

片一方の靴を

バスのなかに置き忘れたりしたら

それは恥つてもんだぜ！

でも皆がそうやってるんだ

トーゴ、トーゴ、トーゴ

全く困った問題だぜ！

今日もまたバスに乗って、アビジャン中に散らばって行くヌッシ達。さて、彼は今日、何枚のトーゴを稼げるだろう？

(すずき・ひろゆき/慶応義塾大学大学院)